

ヨーロッパの歴史と文化 01 (参考資料・ウィキペディア)

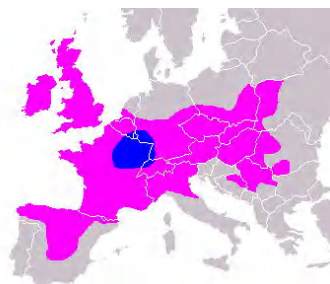
ヨーロッパの誕生



1. ケルト人の文化

1-1. ケルト人とはなにか

ケルト人 (Celt, Kelt) は、中央アジアの草原から馬と車輪付きの乗り物 (戦車、馬車) を持ってヨーロッパに渡来したインド・ヨーロッパ語族ケルト語派の民族である。古代ローマ人からはガリア人とも呼ばれていたが、「ケルト人」と「ガリア人」は必ずしも同義ではなく、ガリア地域に居住してガリア語またはゴール語を話した人々のみが「ガリア人」なのだとも考えられる。ブリテン諸島のアイルランド、スコットランド、ウェールズ、コーンウォール、コーンウォールから移住したブルターニュのブルトン人などにその民族と言語が現存している。(青- 紀元前1500年から紀元前1000年
紫- 紀元前400年)



ケルト人はおそらく青銅器時代に中部ヨーロッパに広がり、その後期から鉄器時代初期にかけて、ハルシュタット文化 (紀元前1200年～紀元前500年) を発展させた。当時欧州の文明の中心地であったギリシャやエトルリアからの圧倒的な影響の下、ハルシュタット鉄器文明はラ・テーヌ鉄器文明 (紀元前500年～紀元前200年) に発展する。

やがて紀元前1世紀頃に入ると、各地のケルト人は他民族の支配下に入るようになる。ゲルマン人の圧迫を受けたケルト人は、西のフランスやスペインに移動し、紀元前1世紀にはローマのガイウス・ユリウス・カエサルらによって征服される。カエサルの『ガリア戦記』はガリア (ゴール) のケルト社会に関する貴重な文献である。やがて500年にわたってローマ帝国の支配を受けたガリアのケルト人 (フランス語ではゴール人) は、被支配層として俗ラテン語を話すようになり、ローマ文化に従い、中世にはゲルマン系のフランク人に吸収されフランス人に変質していく。

1-2. ケルト文明

ケルト人の宗教は自然崇拝の多神教であり、ドルイドと呼ばれる神官がそれを司っていた。初期のドルイドは、祭祀のみでなく、政治や司法などにも関わっていた。彼らは、その教を文字にする事は正しくないと考え、口承で伝えたので、全てを暗記するには二十年もかかった者もいた、といわれている。それ以外の記録の為には、ギリシア文字を借用していた。碑文などの言記表記をする際に後にギリシア語やラテン語を参照にして、ケルト人独自



のオガム文字が生まれた。これは4世紀から7世紀頃まで碑文等に表記をする際に使用されたが、基本的には文字を持たない文化であった。後世にケルト人がキリスト教化すると、オガム文字はラテン文字に取って代わられた。キリスト教化したあとも、ケルト人独特の文化はまったく消滅したわけではない。現代でもウェールズやスコットランドやアイルランドには、イングランドとは異なる独自の文化がいくらか残っている。

1-3. ガリア人

ガリア人（ラテン語：Galli ガッリー、フランス語：Gaulois ゴルワ）は、ケルト語派を話すいわゆるケルト人のうち、ガリア地域に居住してガリア語あるいはゴール語を話した諸部族の人々を指す。古代ローマ人は、ローマ側による呼称「ガリア人」（Galli）と「ケルト人」（Celtae）をおおむね同義として扱った。しかし、いわゆるケルト人の中でも、小アジアに移住したケルト人（ガラティア人）やブリテン島の諸部族に対してガリア人は明らかに区別することができよう。

2. ガリア戦記を読む

2-1. カエサルの遠征

ガリア戦争は、紀元前58年から紀元前51年にかけて、ローマのガリア地区総督ガイウス・ユリウス・カエサルがガリア（現：フランス、ベルギー、スイス等）に遠征してその全域を征服し、共和政ローマの属州とした一連の戦争を指す。



紀元前59年にコンスル（執政官）の任期を終えたカエサルは、翌紀元前58年からプロコンスル（前執政官）としてイリュリア、ガリア・キサルピナ（アルプス以南のガリア）、ガリア・トランスアルピナ（アルプス以北のガリア）の属州総督となった。ガリア・キサルピナはすでに属州ガリアとしてローマ支配下にあったが、ガリア・トランスアルピナはいまだローマの勢力が及んでおらず、カエサルは5年間のインペリウム（軍事指揮権）を元老院より委ねられた。当時のガリアは、スエビ族出身のゲルマニア人アリオウストゥスがアドマゲドブリガの戦い（紀元前61年頃）でガリア人を破り、レヌス川（現：ライン川）に近いガリアー帯に勢力圏を形成し、更にガリア人を追いやってその支配領域を広げつつあった。（黄色がカエサル支配の属州、ピンクがカエサルが征服したガリア）



一連のガリア戦争によって、カエサルはガリア全域をローマの支配圏に組み入れた。この戦争により、カエサル自身も将軍としての実績を積んで権威を高め、ガリアからの莫大な戦利品により財産を蓄えた。また、長年の苦楽を共にした将兵たちは、共和政ローマにて

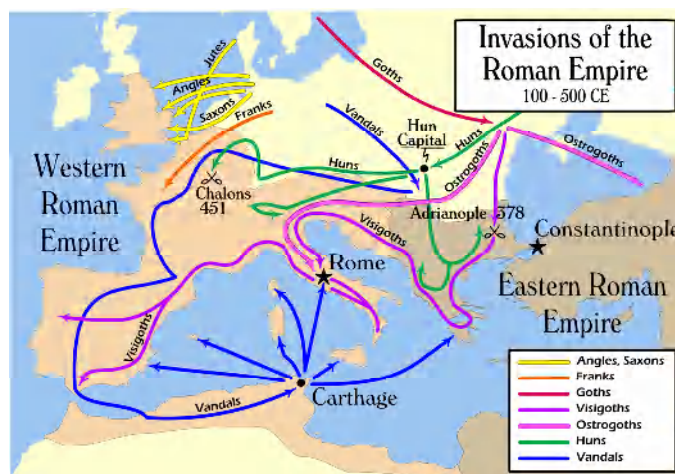
はなくカエサル個人に忠誠を誓うようになり、精強な私兵軍団を形成した。名声高まるカエサルの勢力を恐れた元老院派はグナエウス・ポンペイウスと結んでカエサルと対抗する姿勢を強め、紀元前49年1月10日のカエサル及び配下のローマ軍団によるルビコン川渡河から始まる、ポンペイウス及び元老院派との内戦へ突入することとなった。

3. 異民族の侵入

3-1. ローマ帝国と異民族

古代ローマがいわゆるローマ帝国となったのは、イタリア半島を支配する都市国家連合から「多民族・人種・宗教を内包しつつも大きな領域を統治する国家」へと成長を遂げたからであり、帝政開始をもってローマ帝国となった訳ではない。

紀元前27年よりローマ帝国は共和政から元首政（帝政）へと移行する。ただし初代皇帝アウグストゥスは共和政の守護者として振る舞った。ディオクレティアヌス帝が即位した285年以降は専制君主制（ドミナートゥス）へと変貌した。



4世紀のコンスタンティヌス1世のとき、首都をローマからコンスタンティノポリス（コンスタンティノープル）へ遷し、同世紀末に東ローマ帝国と西ローマ帝国に分裂した。

その後帝国の東西は別々の道を辿った。476年に西ローマ帝国は滅亡、東ローマ帝国も7世紀以降は領土を大きく減らし、国家体制の変化が進行した。その東ローマも1453年には滅ぼされ、ローマ帝国は完全に滅亡した。

3-2. 異民族の侵入

イタリア半島では五賢帝時代から産業の空洞化が始まっており、ローマ帝国末期を通じて、西ローマが経済的な下降線を辿っていった。中央の権力が弱まると、国家として国境や属州を制しきれなくなり、致命的なことに、地中海をも掌握できなくなった。歴代のローマ皇帝は蛮族を地中海へと立ち入らせなかったのだが、ヴァンダル族はとうとう北アフリカを征服してしまう。

これは西ローマ帝国の農業において、深刻なダメージとなった。ローマ帝国は帝政期以前より、イタリア半島ではオリーブや葡萄や食肉などの貴族の嗜好品を中心とする農業を営んでおり、主食たる小麦についてはシチリアや北アフリカなどの属州に依存していた。ところが地中海に蛮族の侵入を許した事によって、この農業体制が崩壊してしまうのである。

西ローマは408年にスティリコがホノリウスによって自殺させられると、ホノリウスが親政を執り、423年に没するまで帝位に就いていたものの、その治世は蛮族（とりわけヴェ

ンダル族と東ゴート族)の侵入と帝位篡奪者とが相次いだ。410年に、紀元前4世紀のガリア人の侵入以来、初めてローマが掠奪される。西ローマ帝国において、篡奪者たちによって一貫して引き起こされた不安定状態は、蛮族にとって征服の手助けとなり、5世紀になると蛮族が帝位篡奪者に成り果てた。475年には、かつてアッティラの腹心だったオレステスが、ユリウス・ネポス帝をラヴェンナから追放し、わが子ロムルス・アウグストゥルス(正式にはロムルス・アウグストゥス。アウグストゥルスは小アウグストゥスの意)が皇帝であると宣言したのである。いくつかの孤立地帯において西ローマ帝国の支配が続いたものの(例:執政官シアグリウス支配下のガリア北西部、アウレリウス・アンブロシウス支配下のブリタニア)、西ローマ全域における帝国の支配権はとうに失われていた。476年にオレステスが、オドアケル率いるヘルリ連合軍に賠償金を与えることを断ると、オドアケルはローマを荒掠してオレステスを殺害、ロムルス・アウグストゥルス帝を退位させて帝位のしるしを東ローマ帝国皇帝ゼノンのところに送り返し、自らはゼノン帝の宗主権の下のイタリア王として立った。

4. クローヴィスのフランク王国

4-1. クロヴィス1世

クロヴィス1世[1](Clovis Premier、466年・511年)は、メロヴィング朝フランク王国の初代国王(在位481年・511年)。クロヴィス2世や3世もいるが、クロヴィス1世の存在が偉大であるため、単にクロヴィスといえば、通常クロヴィス1世を指す。サリー・フランク族の王キルデリクス1世を父としてトゥルネー(現ベルギー領)で生まれた。当時は現代のフランス・ベルギー国境付近のトゥルネー、カンブレールを中心とするライン川低地西部を占めていたに過ぎなかった。

481年に即位したクロヴィスはライン川北岸のフランク人を統一、486年にはガリア北部を支配していた西ローマ系軍閥シャグリウスをソワソンの戦いで破り、版図を一挙にロワール川北部に拡大、旧ローマ属州ベルギカ・セクンダを支配下に治めた。さらにクロヴィスは妹のアウドフレドを東ゴート王国のテオドリク大王に嫁がせて同盟を固め、493年にはブルグンド王国の王女クロティルドとソワソンで結婚した。

496年から497年にかけて、アラマンニ人との戦いの後、王妃クロティルドの薦めでカトリックに改宗した。東ローマ帝国の人物との接触の長いフランク族の王クロヴィスはキリスト教ニカイア派を信仰していた[3]。この改宗はゲルマン民族諸王の中で初めて行われたカトリックへの改宗であった。一方西ゴート族やヴァンダル族はすでにキリスト教に改宗していたが、その宗派はアリウス派であった。当時のガリア住民は大部分カトリックであったため、クロヴィスのカトリック改宗はガリア領内のローマ系市民との絆を強化するものであった。

500年にはディジョンでブルグンド王国と戦い、507年にはアルモリカ人の支援を得てヴィエで西ゴート王アラリック2世を破った。この勝利で勢いをつけたクロヴィスはそのまま西ゴート王国の首都トゥールーズまで進軍し、アキテーヌの大部分を獲得した[4]。フランク王国の領土は北海からピレネー山脈まで大きく拡張され、南フランスを支配していた西ゴート王国はイベリア半島に押し込められた。この遠征の後、クロヴィスは東ロー

マ皇帝アナスタシオスから執政官に任命された[5][6]。508年パリに都を定め、セヌ川左岸に聖ペテロとパウロに捧げた修道院を築いた。その遺構は今もパンテオン近くにクロヴィスタとして残る。

クロヴィスは晩年フランク人の小王を次々に姦計にかけ、そのほとんど全てを抹殺した。それによりメロヴィング朝は他の家系から脅かされることなく、300年近い命脈を保ったと言われている。

クロヴィス1世は511年11月27日に死去し、パリの北方4キロほどの街、サン＝ドニにあるサン＝ドニ大聖堂に埋葬された。その遺領はフランク人特有の財産均等分割相続の慣習に従い、4人の息子テウデリク、クロドミル、キルデベルト、クロタールに分割され、メロヴィング王朝に混乱をもたらした。フランス人の伝統によれば、パリに都したクロヴィス1世はフランス王国の基礎を築いた最初のフランス王であった。クロヴィスの生涯はトゥール司教グレゴリウスが詳細な年代記を残している。

4-2. メロヴィング朝

メロヴィング朝 (仏: Mérovingiens, 英: Merovingian dynasty) は、ゲルマン人であるフランク族の支族のサリ族が築いたフランク王国における最初の王朝である。メロヴィングの名は、始祖クロヴィスの祖父メロヴィクスにちなむ。4子に分割相続して以後、分裂・内紛を繰り返して衰退した。フランドルを支配していた小国の王クロヴィス1世 (465年 - 511年、位 481年 - 511年) が勢力を伸ばし領土を拡大。全フランクを統一し、481年、



メロヴィング朝を開いた。496年、クロヴィスはカトリック教徒であった妻との約束により、ゲルマン人に定着していたアリウス派キリスト教 (異端宗派) より家臣 4,000 名とともに正統派のアタナシウス派キリスト教 (カトリック) に改宗した (クロヴィスの改宗)。これによって王国は崩壊した西ローマ帝国貴族の支持を得、領内のローマ系住民との関係も改善された。506年に西ゴートをグイエレの戦いで破り、その王を戦死させ、イベリア半島へ駆逐。王国の版図を広げた。しかしクロヴィスの死後、王国は4子に分割され国力は衰えた。7世紀に入ると王国はさらに分裂し、次第に分割された分国(地域)の宮宰に権力が移っていく。この状況下でアウストラシアのカロリング家をはじめネウストリア、ブルグンド三分国(地域)の宮宰の台頭は著しいものがあつた。

7世紀後半から王国の行政および財政を取り仕切る宮宰 (きゅうさい, major domus) に実権が移ってゆく。714年から宮宰に就任していたカロリング家のカール・マルテルは教会から没収した土地を家臣たちへ与えて軍を再編。その後、732年にはイベリア半島から領内に進攻してきたイスラム帝国のウマイヤ朝軍をトゥール・ポワティエ間の戦いにおいて破り、西欧キリスト教世界に対するイスラム勢力の進出を食い止めた。751年にマルテルの子、小ピピンがローマ教皇の支持を得てカロリング朝を開いたことで、メロヴィング朝は終わった。

5. カロリング朝とカール大帝

5-1. カロリング朝の成立

フランク族のカロリング家は代々フランク王国のメロヴィング朝に仕え、宮宰（宰相）を輩出してきた家系であった。はじめ大ピピンはフランク王国の分国（アウストラシア）の宮宰であったが、中ピピンにおいてはフランク王国全体の宮宰を務め、小ピピンは至っては遂にメロヴィング朝を廃しカロリング朝を開いた。

751年から987年までフランク王国やそれが分裂した後の東フランク王国・西フランク王国・中フランク王国の王を輩出した。987年、西フランク王国の王家断絶をもって消滅した。（なお、「カロリング」は姓ではなく「カールの」という意味である。当時のフランク人には姓はなかった。）

5-2. ピピンの戴冠

小ピピンは、714年に全フランク宮宰カール・マルテルとその妻クロドトルード（690年 - 724年）の間に生まれた。生地はJupilleは現在ベルギー領であるが、当時はアウストラシア王国内にあった。彼は740年にラン出身のベルトレドと結婚し何人かの子供をもうけた。そのうちカール、カールマン、レドブルガ（ウェセックス王エグバート妃）の3人が成人した。

741年に父のカール・マルテルが死去し、権力はピピンと兄のカールマンの二人に継承された。庶子のグリフォにも割り当てがあった可能性はあるが、この異母弟はピピンとカールマンによって修道院に軟禁された。後にカールマンも自ら修道院での隠棲を望んでアウストラシア宮宰を辞したため、ピピンはもはや名目のみとなったメロヴィング朝のキルデリク3世の下、宮宰としてフランク王国の実権を握った。そして彼はローマ教皇ザカリアスに「王の称号を持つのみのも者と、王ではないが王権を行使する者のどちらが王たるべきか」と尋ね、実権を持つものが王となるべきという回答を得た。これを背景に751年、ピピンはフランク族の貴族たちによってフランク王に選出され、ソワソンで（おそらくマインツ大司教ボニファティウスによって）塗油された。

ピピンは多くの土地を征服し、その権威はクロヴィス1世以来最も高まっていたが、ステファヌス3世が彼をローマ貴族（パトリキ）に叙し、パリのサン＝ドニ大聖堂まで赴いて塗油したのちさらに増した。このときピピンは王位の世襲を望み、ステファヌス3世は息子のカールとカールマンにも塗油を行なった。

ピピンは王位承認の見返りの一環として、754年から755年にかけてランゴバルド王国のアイストゥルフスと戦い、ラヴェンナを奪ってローマ教皇ステファヌス3世に献上した。これはピピンの寄進と呼ばれ、後の教皇領の元となった。また759年にはナルボンヌを奪還してサラセン人（イスラム帝国）をフランスから駆逐することに成功し、さらにアキテーヌも王国に組み入れた。

768年にピピンはサン＝ドニで死去し、サン＝ドニ大聖堂に葬られている。

5-3. カール大帝とその遠征

カール大帝 742年4月2日 - 814年1月28日、アーヘン）は、フランク王国の国王（在位：768年 - 814年）。カロリング朝を開いたピピン3世（小ピピン、714年 - 768年9

月 28 日) の子で、カール 1 世ともいう。768 年に弟のカールマンとの共同統治 (分国統治) として彼の治世は始まったが、カールマンが 771 年に早逝したため、以後 43 年間、単独の国王として長く君臨した。800 年には西ローマ皇帝 (皇帝在位: 800 年 - 814 年) を称したが、東ローマ帝国はカールのローマ皇帝位を承認せず、僭称とみなした。

カールの生涯の大半は征服行で占められていた。46 年間の治世のあいだに 53 回もの軍事遠征をおこなっている。

小ピピンの死後、イタリアのランゴバルド王国の王デシデリウスは王女をカールの妃としてフランク王国からの脅威をとりのぞき、ローマ教会への影響力を強めて勢力挽回を図ろうとした。なお、ランゴバルドは、イタリア語では「ロンバルド」と呼び、ロンバルディア州、ロンバルディア平原の語源となった。770 年、カールは王女と結婚したが、デシデリウスがローマへの攻撃を開始し、773 年、ローマ教皇ハドリアヌス 1 世 (在位: 772 年 - 795 年) がカールに援軍を要請するに至って、カールは義父にあたるランゴバルド王と対決することに方針を定め、妃を追い返してアルプス山脈を越えイタリアに攻め込んだ。翌 774 年にはランゴバルドの首都パヴィアを占領し、デシデリウス王を捕虜として「鉄の王冠」を奪い、ポー川流域一帯の旧領を握ると、みずからランゴバルド王となってローマ教皇領の保護者となった。さらに父王ピピンの例にならって中部イタリアの地を教皇に寄進した。

772 年には、ドイツ北部にいたゲルマン人の一派ザクセン族を服属させようとし、ウィドゥキントを降伏させたほか、10 回以上の遠征をおこなったザクセン戦争をすすめて 804 年には完全にこれを服属させ、今日あるドイツの大半を征服することで領土を拡大した。カールは、抵抗する指導者を死刑や追放に処し、フランク人を移住させるなどの方法で反抗をおさえた。

778 年、カールはスペインのカタルーニャに遠征した。この時のカールの遠征を題材にしたのが『ローランの歌』である。ローランはカールの甥で最も危険な後衛部隊をひきいていたが、味方の裏切りにあいイスラム軍に包囲されてしまう。孤立無援のローランは助けを求めず、カールより賜った剣デュランダルで最後のひとりになっても戦った。このなかでカールは 200 歳を越す老騎士として登場する。

カールのスペイン遠征の成果により、後ウマイヤ朝のイスラム勢力を討ってエブロ川以北を占領して 795 年にはスペイン辺境領をおいた。北のフリース族とも戦い、西ではブルターニュを鎮圧して、東方ではドナウ川上流で土豪化していたバイエルン族を攻めて 788 年にはこれを征服するとともに、791 年以降はドナウ川中流のスラヴ人 (ヴェンド族) やパannonia 平原にいたアヴァールを討伐してアヴァール辺境領をおき、792 年にはウィーンに



ペーター教会を建設している。アヴァールは、中央アジアに住んでいたアジア系遊牧民族でモンゴル系もしくはテュルク系ではないかと推定される。6世紀以降、東ローマ帝国やフランク王国をはじめとするヨーロッパ各地に侵入し、カール遠征後はマジヤール人やスラヴ人に同化していったと考えられる[1]。

結果としてカールの王国は現在のフランス、ベルギー、オランダ、ルクセンブルク、スイス、オーストリア、スロヴェニア、モナコ、サンマリノ、バチカン市国の全土と、ドイツ、スペイン、イタリア、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、クロアチアの各一部に広がった。このことにより、イギリス、アイルランド、イベリア半島、イタリア南端部をのぞく西ヨーロッパ世界の政治的統一を達成し、イングランド、デンマーク、スカンジナビア半島をのぞく全ゲルマン民族を支配してフランク王国は最盛期を迎えた。カールは、ゲルマン民族の大移動以来、混乱した西ヨーロッパ世界に安定をもたらしたのである。

カールは征服した各地に教会や修道院を建て、その付属の学校では古代ローマの学問やラテン語が研究された。また、フランク王国内の教会ではローマ式の典礼を採用し、重要な官職には聖職者をつけ、十分の一税の納入を徹底化させている。さらに、住民を、キリスト教のアタナシウス派（カトリック教会）に改宗させてフランク化もおこなった。カールはまた、広い領土を支配するために全国を州に分け、それぞれの州に「伯」（Comes、Graf）という長官を配置し、地元有力者を任命して軍事指揮権と行政権・司法権を与えるとともにその世襲を禁じた[2]。荘園経営の指針として荘園令を出したといわれる。さらに、伯の地方行政を監査するため、定期的に巡察使（ミッシ・ドミニ）を派遣するなど、フランク王国の中央集権化を試みている。

5-4. カロリング・ルネッサンス

内政においてカールは、アインハルト（エギンハルトゥス）やアングロ・サクソン人で宮廷付属学校の校長となったアルクイン

（アルクィヌス）、スペインのテオドゥルフ、イタリアからはピサのペトルスやパウルス・ディアコヌスなど内外から高名な学者や知識人、修道士を宮廷に招聘し、一般にカロリング朝ルネッサンスと呼ばれるラテン語の教育に基づく文化運動を企図した。

それは、王国の維持に必要とされる聖職者や官吏を養成するという色合いの濃いも

のであり、一部のエリート層のみを中心とする閉鎖的な性格を持っており、修道院文化としての限界をもつものであったため、通念としての「ルネッサンス」の名を冠すことについては適切ではないとの異論もある。ただし、中世西ヨーロッパにおける最初の大規模な文化運動、また古典古代の学芸を存続しようとする動きの一環として無視できない重要な意義を有している。

正確には、カールが強力な軍事力で東はエルベ川から西はピレネー山脈を越えてエブロン川、北は北海沿岸から南は中部イタリアに広がる広大な土地を支配するに至った目的は、教父哲学におけるキリスト教の伝承と合致したかたちでフランク人の社会を変革してゆく



ことであった。教会の学問を世俗政府の中枢において営み、伝道を実現しようとしていたのである。中世において学芸は政治と深く関わっており、政治と宗教は切り離せないものであった。

1978年に世界遺産に登録されたアーヘン大聖堂（ドイツ、ノルトライン＝ヴェストファーレン州）はしばしば「皇帝の大聖堂」（ドイツ語：Kaiserdom）と呼称される。786年にカールがアーヘンに宮殿教会の建設を始めたもので、現在の大聖堂は805年完成の八角形の宮廷礼拝堂に1414年のゴシック様式の聖堂を併設したものである。

5-4. カールの戴冠と死

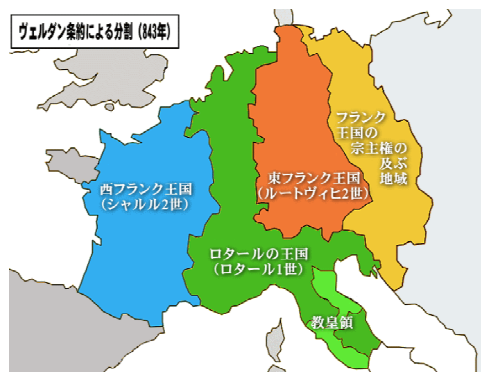
カールは、800年11月、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂でのクリスマス・ミサに列席するため、長男カール、高位の聖職者、伯、兵士たちからなる大随行団をしたがえ、イタリアへ向かって5度目のアルプス越えをおこなった。ローマから約15kmのところではカールはローマ教皇よりじきじきの出迎えをうけた。そして、サンピエトロ大聖堂まで旗のひるがえる行列の真ん中で馬上にあって群衆の歓呼を浴びつつ進むと、教皇はカールを大聖堂のなかへ導いた。800年12月25日の午前中のミサで、ペトロの墓にぬかずき、身を起こしたカールに、教皇レオ3世（在位：795年－816年）は「ローマ皇帝」（神により加冠されし至尊なるアウグストゥス、偉大にして平和的な、ローマ帝国を統治するインペラートルとして帝冠を授けた。このとき、周囲の者はみな、「けだかきカール、神によって加冠され、偉大で平和的なローマ人の皇帝万歳」と叫んだという。なお、レオ3世は前年（799年）、対立する勢力に命を襲われ、カールのもとに逃げ込んだことがあった。カールの戴冠は、教皇をたすけたことへの報酬でもあり、教皇権の優位の確認でもあり、東ローマ帝国への対抗措置でもあったのである。

カールは、「兄弟間の連帯による統一というフランク的な王国相続の原理」[13]に従い、806年に「国王分割令」（ディヴィシオ・レグノールム）を定め、三人の嫡子、すなわち嫡男カール・ランゴバルド分国王ピピン・アクイタニア分国王ルートヴィヒを後継者とした。しかし、810年にピピンが、翌年には嫡男カールが父に先立って没したため、813年、ただ一人残った息子ルートヴィヒを共同皇帝とした。翌814年1月28日、カールはアーヘンにおいて死去した。カールの遺体はアーヘン大聖堂に埋葬され、遺骨はいまも特別の神殿に保存されている。

6. カールの帝国の分割

6-1. ヴェルダン条約と帝国の三分割

ヴェルダン条約は、843年にフランク王国（カロリング朝）の王ルートヴィヒ1世（敬虔王、ルイ1世）の死後、遺子であるロタール、ルートヴィヒ、カールがフランク王国を3分割して相続することを定めた条約。この条約によって東フランク王国、西フランク王国、中フランク王国が誕生し、それぞれ現在のドイツ、フランス、イタリアの原型が形成された。



814年にカール大帝が歿すると、彼の後を継いだルートヴィヒ敬虔王は817年、「帝国整備（計画）令（*Ordinatio Imperii*）」を發布。長男ロタール（*Lothar*）を共同統治者とすると共に、ロタールには王国本土を、次男ピピン（*Pippin*）と三男ルートヴィヒ（*Ludwig*）にはそれぞれアキタニアとバイエルンとを与える分割統治案を定め、分権的統一王国の創出を図った。

フランク族には「領土相続権を長子のみを与えるのではなく、分割相続させる」という慣習が存在した。帝国計画令は、この分割相続の理念と統一国家維持の理念との妥協点を見出すために發布されたものであった。

しかし、823年に第2妃ユーディットとの間に末弟カール（*Karl*）が誕生すると、彼を偏愛する敬虔王はカールが不利益を被ることを避けるため、831年、国土分割的理念を新たな統治案に盛り込み、カールにも領土を与えることを決めた。

ロタールら3兄は、手中に収まるはずの領土が削減されたことに不満を募らせた。リヨン大司教アゴバルト（*Agobard*）ら有力聖職者もこの案に反発した。統一王国の理念を奉じ、832年に3兄が敬虔王への反乱を企てた際には、これを支持。翌833年に敬虔王は廃位された。しかし、その後行われた3兄間の取引は決裂、更に834年に復位を果たした敬虔王は、なおもカールに有利な分割案に執着した。この相続争いは、838年にピピンが死去したことにより、一層激化した。

840年に敬虔王が薨去するに至って、領土を巡る兄弟の対立は頂点を迎えた。841年、フォントノワの戦い（*Schlacht von Fontenoy*）で3者は会戦。王国全土を領有せんとするロタールに対し、ルートヴィヒとカールは同盟を結び、ロタール軍を撃破した。更に翌842年、ストラスブールの誓約（*Serments de Strasbourg*）で2人は同盟関係を再確認、国土の分割をロタールに迫った。こうした圧力の結果、843年8月10日にルートヴィヒとカールはヴェルダン（*Verdun*）において、王国を3分する案をロタールに呑ませた。ロタールの野望はここに潰えたのである。

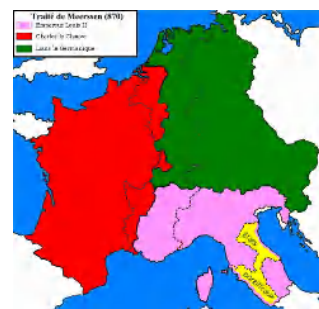
6-2. メルセン条約によるイタリア・フランス・ドイツの誕生

メルセン条約は、870年にフランク王国の領土の再画定を定めた条約。中部フランク王国の一部を治めていたロタール2世の死去に伴い、東フランク王国の王ルートヴィヒ2世と西フランク王国の王シャルル2世とが締結した。

843年のヴェルダン条約により、フランク王国は三分割されて

いた。そのうちの中部フランク王国は855年のロタール1世の死に伴い、その3人の息子ロドヴィコ2世（*ルイ2世*）、ロタール2世、カール（*シャルル*）によってさらに分割され、それぞれイタリア、ロタリングア、プロヴァンスを治めることとなった。863年にカールが死に、さらに869年にロタール2世が死ぬに至り、ルートヴィヒ2世とシャルル2世が中部フランク王国の分割を取り決めたのがメルセン条約である。この結果、ロドヴィコ2世はイタリアのみの領有が許され、ロタリングアは東フランクに、プロヴァンスは西フランクに組み込まれることとなった。

これによって、現在のイタリア、ドイツ、フランスの原型が形作られたと言える。



7. フランスの誕生

7-1. シャルル2世

シャルル2世(禿頭王)(仏: Charles II le Chauve, 独: Karl II der Kahle, 823年6月13日 - 877年10月6日)は、カロリング朝西フランク王国の初代国王(在位: 843年 - 877年)である。後にカール2世として西ローマ皇帝を兼任した(在位: 875年 - 877年)。ルートヴィヒ1世(ルイ敬虔王)と三番目の妃ユーディットの子で、ロタール1世、アキテーヌ王ピピン1世、フランク王ルートヴィヒ2世の弟に当たる。

823年6月13日、フランクフルト・アム・マインに生まれた。840年にルートヴィヒ1世が歿すると、フランク王国ではロタール1世、ルートヴィヒ2世、そしてシャルル2世の三兄弟による領土をめぐる争いが起こった。まず、842年、ルートヴィヒ2世との間で対ロタール1世のストラズブールの誓いにより同盟を組んだ。翌843年に三兄弟は王国の領土をそれぞれ分割することで統治することとなった。ロタール1世はフランク王国中部と西ローマ皇位、ルートヴィヒ2世は東フランク王国、そしてシャルル2世は西フランク王国と



いう具合である。これが、ヴェルダン条約である。しかし、国内の貴族勢力の統制に苦しみ、さらにノルマン人やヴァイキングの侵攻に苦しめられて、その治世は多難を極めた。そして869年、兄のロタール1世(ロタール1世は855年に死去)の子・ロタール2世が死去すると、シャルル2世は東フランク王ルートヴィヒ2世と再び領土交渉を行ない、870年にロレーヌ地方を中心とした兄の遺領を分割したのである。兄の遺児でロタール2世の後を継いだルートヴィヒ2世(ルイ2世)には、イタリアの領有と西ローマ皇位のみを認めている。これを、メルセン条約という。こうしてここに、現在のフランス、イタリア、ドイツのもとが作られたのである。そして875年、西ローマ皇帝ルートヴィヒ2世が死ぬとすかさずイタリアに侵攻して同地を併合し、カール2世として西ローマ皇帝に即位した。

877年10月6日死去。54歳没。後を子のルイ2世(吃音王)が継いだ。

7-2. 西フランク王国からフランスへ

西フランク王国(仏: Francie occidentale 独: Westfrankenreich)は西ヨーロッパに存在した王国(843年 - 987年)。フランス王国の原型にあたる。

カール大帝が西ヨーロッパを統一したフランク王国も、大帝の死後早くから、内部紛争により国家分裂の危機が生じていた。帝国分裂を防ぐため、度々帝国整理令が出されるが、効果は上がらず、843年、皇帝ルートヴィヒ(ルイ1世)の死後、彼の3人の遺児が帝国を分割統治し、ヴェルダン条約により、正式に帝国は分裂。帝国西部旧ローマ属州ガリア



地方に西フランク王国が、イタリア半島北部を中心に中部フランク王国（ロタール相続領）、帝国東部ゲルマニア地方に東フランク王国が成立。

西フランク王国の初代はカール2世（シャルル2世）、禿頭王とも呼ばれる。地方分権化が進み、王権は当初から弱体で、このことは後のフランス諸王朝の悩み種となる。

987年にルイ5世（怠惰王）の夭折をもってカロリング家の血統は断絶し、王室の縁戚関係にあるカペー朝のユーグ・カペーが継承した。以後、フランス王国と呼ばれる。

7-3. ユーグ・カペーとカペー朝の誕生

987年、西フランク王国の国王ルイ5世の死去によりカロリング朝は断絶した。このため、諸侯の推挙により、フランス公兼パリ伯で、ロベール家の出身者であるユーグ・カペーが国王として推挙され、フランス王として即位することとなった。

しかしカペー朝は国王の権力基盤が非常に弱く、各地に伯（ Comes ）と呼ばれる諸侯たちが割拠しており、さらに隣国・イングランドの王位を持つノルマンディー公家（後にプランタジネット家）による圧迫を受けてフランスの領土の大半を支配されていた。

国王はパリを中心とするイル＝ド＝フランスを抑えるのみで、王としての権威の他にはほとんど実効的な権力をもたなかった。

